慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 貿易理論と貨幣理論との論理的関係 : 正統学派貿易理論研究 |
| Sub Title | |
| Author | 岩田, 仞 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1937 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.7 (1937. 7) ,p.1031(103)- 1067(139) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19370701-0103 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370701-0103 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 貿易理論と貨幣理論との論理的關係

## ——正統學派貿易理論研究——

岩田仞

目次

——古典學派理論——
第一節　序論　一〇三
第二節　貨幣理論に於ける二元性　一〇三
第三節　國際貨幣理論の混亂
一、金屬主義的見解
二、名目主義的見解
第四節　貿易理論と貨幣理論との交渉
一、金屬主義——比較生産費原理
二、名目主義——國際價値論
第五節　結論
貿易理論と貨幣理論との論理的關係

## 第一節　序論

個人主義經濟學に於ける外國貿易理論の主たる內容は國際價格理論である。（註一）而して一般價格理論に於て財貨の交換價値、價格を說明する場合、貨幣價値は一定であるとの前提の下に行はれ、貨幣價値の說明は貨幣理論として別個に取扱はれるのが常である。勿論斯かる分業は單に便宜上の問題であつて、價格理論と貨幣理論との間に論理的矛盾の存しない事が要求されるのは云ふ迄もない。國際價格理論に關しても同樣の事が云ひ得る。古典學派論者は國際價格理論として比較生產費原理と國際價値論とを提供し、國際間に於ける財貨交換比率の決定を說明した。從つて其の際貨幣價値に關する說明は省略されて居り、國際價格理論の完結性を求める爲めには、その問題を貨幣理論に於て解決する必要がある。而して古典學派國際價格理論に於ては次の二つの理由からして、價格理論と貨幣理論との關係が特に重要である。即ち一つには、國際價格理論が貨幣制度の異つた、貨幣價値の相異せる地域間に交易される財貨の價格を取扱ふ結果、價格と貨幣價値とは密接な關係に置かれて居る事。（註二）二つには古典學派國際價格理論は同時に自由貿易主義の論據として、貿易政策原理的意義を有して居る結果、貨幣現象下にその妥當性を主張する爲めに貨幣價値の說明が常に關聯して與へられなければならない事。（註三）之等の要求を充す爲めに、古典學派論者は所謂正貨移動論を提供した。（註四）而してそれは果して充分なものであらうか。此の點を考察し、古典學派に於ける貿易理論と貨幣理論との關係を吟味するのが本稿の目的である。

（註一）　拙稿「貿易理論の發展と貿易政策原理」本誌昭和十一年十月號八〇頁參照。

（註二）　國際貿易を貨幣制度を異にする地域間の交易と規定する論者は少くない。それは古典學派論者が國際貿易を勞働と資本の移動困難なる地域間の交易と看做したのと對照して、近代的理論の最も重要なる特色の一つである。Cassel, Theoretische Sozialökonomie, 1927, S. 609.—Eugen Melchinger, Die internationale Preisbildung, 1929, S. 65-66.-Franz Eulenburg, Aussenhandel und Aussenhandels-politik. 1929, S. 9.-Barrett Whale, International trade, 1932, p. 10-11.

（註三）　前揭拙稿「貿易理論の發展と貿易政策原理」八〇—八三頁。

（註四）　拙稿「正統學派貿易理論」本誌昭和十年二月號一一〇—一一二頁參照。

## 第二節　貨幣理論に於ける二元性

古典學派に於ける貿易理論と貨幣理論との關係を吟味するに當つて、先づ彼等の貨幣理論が如何なるものであるかを檢討する必要がある。（尙ほ古典學派論者の貿易理論（國際價格理論）に關しては、拙稿「國際價格理論」本誌昭和十年八月號八二—九二頁、及び「貿易理論の發展と貿易政策原理」本誌昭和十一年十月號九二—九九頁を參照せられたい。）

貨幣理論の分野に於て我々は金屬主義學說と名目主義學說との對立を見る。（註五）而して古典學派貨幣理論にあつては、その何れが基本的なものであるかに關して論者に依りその說く所區々であるが、此の對立する二樣の見解が同時に主張せられて居る點に付ては異論のない所であらう。（註六）

一般價値法則に於て勞働價値法則乃至費用法則を主張せる彼等は、貨幣價値の說明に際しても、少くとも商品貨幣に關する限り同一法則を適用し、素材價値に依つて貨幣の價値を說明せんとしたのは當然である。即ち貨幣の價値は金銀の價値に外ならず、金銀の價値は又一般商品の價値法則に依つて規定せられ、貨幣價値法則と商品價値法則とは何等異る所なく、寧ろ前者は後者の一適用と看做されるべきであると考へる。リカード曰く、「金銀も他の一切の貨物と同じく、一に之を生產し、且つ市場に齎すに必要なる勞働量に比例してのみ價値を有する。」（註七）と。又

ジェ・エス・ミル曰く、「貨幣の價値は結局に於て、それを構成する金屬の價値に歸着する。……貨幣の素材たる金銀は、財貨たる點に於て他の財貨と異る所なく、その價値は他の財貨と同樣にその生產費に左右せられる。」（註八）と。

斯くの如く古典學派論者は一方に於て金屬主義的見解をとり貨幣價値を素材價値に依つて說明せるにも拘らず、他方に於て名目主義的見解に基く貨幣數量說が見出せる。リカード曰く、「若し一國に於て金鑛が發見されたとすれば、その國の流通場裡に持出される貴金屬の量が增加する結果、貨幣の價値は下落するであらう。……一國に於て鑛山の發見される代りに英蘭銀行の如き流通媒介物たる銀行券發行の權能を有する銀行が創設され、然も商人への貸出、政府への貸付の方法に依つて多額の銀行券が發行され、その爲めに貨幣數量が激增したとすれば、それは鑛山發見の場合と同一の結果を生ずるであらう。即ち貨幣の價値は下落して、それに比例して財貨の價格は騰貴するであらう。」（註九）と。又ジェ・エス・ミル曰く、「故に他の事情にして等しければ、貨幣の價値はその數量に反比例して變動する。即ち其の數量の增加は正確に同一の割合を以て貨幣の價値を騰貴せしめる。」（註一〇）と。

然らば貨幣價値の說明に際して同時に用ひられて居るかゝる二樣の見解、金屬主義學說と名目主義學說、素材價値論と貨幣數量說は如何なる關係にあるべきか。古典學派論者は當然此の問題を解決しなければならない。而して之はリカードにあつては未だ充分意識されず、ジェ・エス・ミルに至つて試みられた。彼は一般價値論上に於て費用法則と需要供給法則とを結合せると同一の方法を以て、貨幣數量說を需要供給法則に依つて基礎付ける事に依つて、費用法則の貨幣への適用たる素材價値論と結合したのである。即ち商品の價値がその時々の需要供給の關係に依つて決定せられるが究極に於て生產費に歸着すると同樣に、貨幣の價値も亦一時的にはその需要供給關係で決定せられるが久しきに亘つてその生產費から離れる事は不可能であると考へる。此の場合貨幣の需要供給關係とは、商品對貨幣の數量關係を意味し、商品數量を一定とすれば貨幣數量の增減と看做される。ミル曰く、「市場に存在する全商品が貨幣に對する需要を形成すると同樣に全貨幣が商品に對する需要を形成する。貨幣と商品とは相互に交換されんが爲めに相互に求め合つて居る。彼等は相互に供給となり需要となる。從つて此の現象を名付けて商品の需要供給と云つても、又貨幣の需要供給と云つても差支へない。兩者は同一の事實を表現して居るのである。……此の割合は貨幣數量の增加割合と同一なる事を注意しなければならない。」（註一一）と。かくて素材價値論と貨幣數量說とは對立する理論ではなくして、互に相補ふ關係にある事が論證された。ミル曰く、「貨幣は一の商品である。而して其の價値は一般商品の價値と同樣に、一時的には需要と供給に依つて、究極的且つ平均的には生產費に依つて決定せられる。」（註一二）と。

併し乍ら右の如き說明は果して妥當なものであらうか。兩理論が貨幣本質觀を異にする意味に於て、その結合が可能なりや否やの問題に關する檢討は、此處では省略する事とする。（註一三）成程一般價値論上に於て、需要供給の法則に依つて市場價格を說明し、費用法則に依つて自然價格を說明する場合には、その間に矛盾は生じないかもしれない。（勿論その場合に於ても、後述する如く一定の前提を必要とする。）併し乍ら之を貨幣價値の說明に際しても無條件に適用する事は果して許される事であらうか。

その場合先づ第一に貨幣が商品貨幣（金）に限定される事、或ひは貨幣と金との間に完全なる代替性ある事、即ち貨幣の鑄造、鑄潰、輸出入の完全なる自由を容認される事が必要である。換言すれば完全なる金本位制度の下で貨幣の價値が金の價値であるか、或ひは少くともそれに一致せしめられる事が必要である。（註一四）ミル曰く、「一

般物價が流通貨幣の數量に依存すると云ふ關係に就て示した命題は、貨幣即ち金銀が唯一の交換手段であつて、賣買取引毎に必ず手から手へ實際に移り行くが如き狀態、即ち如何なる形態に於ても未だ信用の存在せざる狀態に於てのみ適用さるべきものと解さなければならない。」（註一五）と。即ち素材價値論を主張する限り、貨幣の需要供給の法則を說く場合に於ても素材價値を有する金屬貨幣の需要供給關係を論ずるのでなければならない。素材價値論は貨幣の價値をその素材價値に求めるものであるからして、金屬貨幣以外の貨幣をも加へる貨幣數量說とは論理上當然相容れないものである。若し貨幣の供給の內容が、金屬貨幣のみに限定されないとすれば、その說く所の需要供給法則――貨幣數量說は素材價値論と一致しなくなる。（註一六）

次に我々は素材價値論と貨幣數量說を結合する時、更に一つの重要なる前提を設定しなければならない。それは一般價値論上に於て、費用法則と需要供給法則とを結合する爲めに必要な勞働と資本の自由移動と云ふ前提である。市場價格がその時々の需要供給關係に依つて決定されるとしても、それが久しきに亘つて生產費を離れ得ないのは勞働と資本の自由移動に基く利潤率の平均なる事實が存するからである。同じ事は貨幣價値の場合に付ても云はれる。貨幣の價値はその需要供給關係、換言すれば商品と貨幣との數量關係に依つて決定せられるが、勞働と資本の移動が自由で利潤率の平均が行はれる場合にはその生產費を離れて久しく止まり得るものではない。例へば貨幣數量の增加に基いて貨幣價値が騰貴し生產費以上に昇つたとすれば、他の生產に從事せる勞働資本がより高き利潤を求めて移動し來り鑛山の發掘が擴張され、此處に貨幣の供給即ち數量の增加、從つて貨幣價値の下落が行はれる。又貨幣價値が生產費以下に下落したとすれば、鑛山發掘は制限廢止せられ、貨幣供給減少の結果貨幣價値の騰貴が促される。故に究局に於て貨幣の價値はその生產費に一致するものである。かくて勞働資本の移動自由なる前提は素材價値論と貨幣數量說とを結合する際に不可欠な條件であると云はなければならない。

右の如き前提を認めるならば、素材價値論と貨幣數量說とを結合して貨幣價値の說明を行つたとしても、何等論理上破綻を示さないであらう。（勿論素材價値論を單なる生產費法則ではなくして、勞働價値法則に依つて基礎付けんとする場合には、更に他の前提を必要とするが、此處では此の問題には觸れない。）併し乍ら古典學派論者が國際間の現象を取扱ふに際して、右の前提が必しも主張し得られない事を認めるのである。彼等が國際貿易現象を分析するに當つて、右に述べた第一の前提は之を容認し、常に完全なる金本位制度を假定して論を進め、不換紙幣制度下に於ける貿易現象に關しては殆んど無關心な態度をとつて居る。（註一七）而して第二の前提は國際貿易理論に於て常に破棄されて居る。蓋し國際間に於ける勞働資本移動の困難なる事實こそ古典學派外國貿易理論の最も基本的な要素なのである。從つて國際間の貨幣現象を論ずる場合に於ても、勞働資本の移動自由なる前提は設定し得ないのである。果して然りとすれば國際間の貨幣價値の關係を說明するに當つて、素材價値論と貨幣數量說とを同時に使用する事は不可能な筈である。かくて彼等が各國貨幣價値の關係或ひは爲替相場を論ずる場合には、その貨幣理論の二元性（金屬主義と名目主義）の欠陷が暴露し、全く矛盾した二樣の解釋を與へるに至つた。此の點に關して節を改めて論じやう。

（註五）此處で金屬主義學說と名目主義學說との區分に付て一言する必要がある。名目主義と云つた場合、クナップ・ベンディクセン、エルスター等の一聯の貨幣理論即ち記號學說を意味する事が少くない。併し本稿に於ては名目主義を廣義に解し、金屬主義に對立する非金屬主義と云ふ意味で使用する。かゝる粗雜な區分は甚だ嚴密性を缺く樣であるが、古典學派貨幣理論を問題とする限り適當であると考へられる。

（註六）例へばアダム・スミスに關しては、山崎覺次郎氏著「若干の貨幣問題」第四編、高垣寅次郎氏述「アダム・スミスの見たる貨幣理論」（商學研究三卷一號）岡橋保氏著「貨幣本質の諸問題」第三章、リカードに關しては、小泉信三氏著「リカアドオ研究」リカアドオの通貨論、長谷田泰三氏述「デビッド・リカアドーの貨幣數量說」（經濟學論集三卷二號）福田敬太郎氏述（國民經濟雜誌三十一卷一號）春日井薫氏著「貨幣學說研究・本位制度篇」第三章、其の他山口茂氏述「正統學派經濟學と金屬主義貨幣論」（經濟學研究二卷）等を參照されたい。

（註七）Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation, edited by Gonner, p. 112. 小泉信三氏譯三四六頁。

（註八）J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by Ashley, 1926, p. 501.

（註九）Ricardo, The High Price of Bullion. 小畑茂夫氏譯三六頁。

（註一〇）J. S. Mill, ibid., p. 493.

（註一一）J. S. Mill, ibid., p. 490.

（註一二）J. S. Mill, ibid., P. 436.

（註一三）例へば橋爪明男氏著「貨幣論」二五一―二五四頁、萩原吉太郎氏述「貨幣數量說と貨幣本質觀との理論的關係」（本誌二五卷一號六九―七一頁）等參照。

（註一四）完全なる金本位制度の下に於て、即ち所謂金本位制度の自動性が發揮される場合、貨幣の價値が常に金の價値に一致せしめられる事は、何等異論はない。それは理論の問題ではなくして事實である。たゞ議論の生ずる餘地は、かゝる事實並びに此の場合の貨幣の價値に關する解釋に存する。例へば理論上金の價値が貨幣の價値を決定すると見るか、或ひは貨幣の價値が金の價値を決定すると見るかの區別はあるとしても、金の價値＝貨幣の價値の關係におかれる事を認める點に於ては一致する。

（註一五）J. S. Mill, ibid., 495

（註一六）リカードは紙幣の價値を論ずる場合に、その生産費が何であるかと云ふ問題に苦しみ、鑄造料と云ふ特別な生産費を考へた。かゝる說明が如何に困難であるかは說明ずる迄もなからう。

（註一七）最近に於て漸く不換紙幣制度下に於ける貿易の說明が行はるに至つた。Taussig, 'International trade under depreciated paper.' Quarterly Journal of Economics, 1917; International Trade, 1933. part III. - Angell, 'International trade under inconvertible paper.' Q. J. E. 1922; Graham, 'International trade under depreciated paper,' Q. J. E. 1922. 古典學派に於て不換紙幣制度下の貿易が取扱はれなかつたのは、當時不換紙幣制度下の貿易が特殊の場合であつたと云ふ事實に一部分基く事は云ふ迄もないが、より重要な事は、古典學派貿易理論の支柱たる彼等の貨幣理論の理論的性格の爲めに金本位制度下に於ける貿易のみを取扱ふべく餘儀なくされた事である。此の事は本稿を通讀される事に依つて自ら明白となるであらう。

## 第三節　國際貨幣理論の混亂

### 一、金屬主義的見解

國際間に於ける貨幣價値の關係に關する古典學派論者の見解中、先づその金屬主義的說明の部分から考察しやう。

金本位制度を前提とした場合、各國の價格單位たる一定量の金がそれ〴〵の國に於ける諸商品の價格の標準となり、各國爲替相場はその本位貨（金）の重量の比率に依存する。從つて各國貨幣間の價値關係―爲替相場はその法定平價を通じて一定の關係に置かれる。而してその場合各國貨幣の對內價値即ち各國に於ける貨幣（金）對商品の交換比率は如何なる狀態にあるであらうか。金屬主義貨幣學說に從へば、貨幣價値はその素材價値に依つて規定され、然も素材價値は投入勞働量乃至生産費に依つて決定せられる。從つて若し國際間に勞働資本の移動が自由であるとす

れば、各國貨幣の對内價値も亦均等化すべきである。然るに古典學派論者は前述せる如く國際貿易が國内貿易から區別さるべき特殊性を、國際間に於ける勞働資本移動の困難なる點に求めて居る。國際間に勞働資本移動の自由が行はれないと看做す以上、各國本位貨幣金の投入勞働量乃至生産費の均等化は行はず、各國貨幣の對内價値即ち各商品との交換比率も亦相異して居り、各國の價格機構は各々獨立して居ると考へなければならない。リカード曰く、「實際に貨幣の價値は……如何なる二國に於ても決して同一なる事はない……」（註一八）と。かくて古典學派論者は、各國間の爲替相場が法定平價を通じて一定の關係に置かれて居るにも拘らず、各國貨幣の對内價値は各國生産條件の異るに從つて相異つて居ると主張する。換言すれば、各國貨幣の對内價値と對外價値とは必ずしも一致しないと云ふのである。リカード曰く、「此のより高き貨幣の價値は、爲替相場に依つて表示せられぬのであらう。穀物及び勞働の價格は、一國に於て他國よりも一割二割若しくは三割高くても、手形は引續き平價を以て授受されるかも知れない。」（註一九）「各國が各々正しく其の當然有すべき貨幣數量を有する場合には、貨幣は多くの貨物に對して五歩、一割否二割も異ることがあるのであつて、その價値は成程各國に於て同一ではなからうが、併し爲替相場は平價に一致するであらう。英吉利に於ける一百磅又は一百磅中に含まるゝ銀は、一百磅の手形、又は佛蘭西、西班牙又は和蘭に於ける銀の同一量を購ふであらう。爲替相場を論じ、諸國に於ける貨幣の比較的價値を論ずるに當つては、我々は決して何れの國に於ても、その貨物で評價せられた貨幣價値を其證據にしてはならない。爲替は決して貨幣の比較的價値を穀物、羅紗又は其の他何れかの貨物で測定する事に依つて確めらるゝものではなくして、一國の通貨の價値を他國の通貨で測る事に依つて確められるものである。」（註二〇）と。

リカードは右の章句に見られる如く、各國貨幣の價値が正貨の條件に於ては常に等しいが、商品の條件に於いては必しも等しからざる事を認める。然らば不均等なる各國の貨幣對商品の交換比率、換言すれば法定平價で同一標準に還元せる各國に於ける商品價格の差異は何に依つて決定せられるか。金屬主義學說に從へば、それは各國に於ける、一定重量の正貨の生産に必要な勞働量乃至生産費と、諸商品の生産に必要な勞働量乃至生産費との關係に依つて決定せらるべき筈である。リカード曰く、「製造工業の進歩が幼稚で、凡ての國の生産物が殆んど一樣に容積大なる、最も有用なる諸貨物を以て成る、社會發達の初期の狀態に於ては、諸國に於ける貨物の價値は主としてその貴金屬を産する鑛山からの遠近に由つて左右せられるであらう。然るに社會の技術と改良とが進歩して、諸國民が各々特殊の製造に長ずるに至れば、此遠近は依然として計算事項に屬するも、貴金屬の價値は主として是等製造工業の優劣に由つて左右せられる。……余の信ずる所に由れば、世界諸國に於ける貨幣の比較的價値を左右するものは、獨り此の二原因のみである。」（註二一）と。即ち彼は各國に於ける貨幣（正貨）の商品條件に於ける價値は、（一）貴金屬鑛山よりの距離の長短と（二）製造業に於ける優劣の程度の二つに基かしめて居るのである。而して製造業に於ける優劣の程度とは、貴金屬生産との比較に於ける優劣の程度、換言すれば貨幣（正貨）の生産に必要な勞働量との比較に於ける商品生産に必要な勞働量の多少を意味して居る事は明かである。何故なれば、彼は更に語を次いで曰く、「苟も貴金屬をより少なき勞働量を以て生産する事を得せしめる、鑛山經營の利便の上に於ける改良は、皆一般に貨幣價値を下落せしめるであらう。」（註二二）と。又ジェ・エス・ミル曰く、「何れかの國に於て流通媒介物が金屬であり、突然の偶然的增加が行はれた場合を考へてみやう。……（正貨）の流出は總ての國に於ける貨幣が或る水準に達する迄繼續されるであらう。それは各地に於て貨幣が同一の價値となる迄と云ふ事を意味するのではなくして、貨幣價値の差異が以前に存在しただけの差異になる迄と云ふ意味である。その差異は貨幣（正貨）を獲得するに

要する生産費に於ける永久的差異に相當する。」（註二三）と。

而して國際間に於ける勞働資本移動の困難なる結果、右に述べた如き各國貨幣の對内價値、即ち一般商品に對して有する購買力の差異を生ぜしめるとすれば、斯かる事情の下で如何にして各國貨幣間の價値關係が一定せしめられ、爲替相場が法定平價に於て維持せしめられるのであるか。それに對する解答は當然貨幣の對内價値の低い國より高い國への正貨の永續的流出に求めなければならない。リカードも曰く、「二國中、若しも一方は或品質の財の製造に長所を有し、他の一方は別の品質の財の製造に長じて居たならば、貴金屬は、何れの國にも著しく流入する事はなからう。併し、若しも長所が何れか一方に甚しく偏重であつたならば、彼の結果は避けられぬであらう。」（註二四）「假定せられた事情の下に於ては、斯かる價格の差異は事物自然の順序たるものであつて、爲替相場は、製造工業に秀いでた國に、其穀物及び勞働の價格を騰貴せしめる丈けの充分なる貨幣數量が輸出せらるゝ場合にのみ平價に居る事を得るものである。」（註二五）と。

以上述べた如くに古典學派論者は金屬主義的見解に基いて國際間の貨幣現象を説明して居る。即ち各國貨幣の價値關係―爲替相場は、國際間に於ける正貨の永續的移動に依つて法定平價に一致せしめられるけれども、各國貨幣の對内價値即ち商品購買力、從つて法定平價に依つて換算した同一本位貨幣に依る商品價格は、各國に於てその生産條件を異にするに從つて永久的に差異あるものであると主張する。

（註一八）Ricardo, Principles., p. 123-4. 前掲邦譯一二八頁。

（註一九）Ricardo, ibid., p. 127. 邦譯一三一頁。

（註二〇）Ricardo, ibid., p. 128. 邦譯一三二頁。

（註二一）Ricardo, ibid., p. 124-6. 邦譯一二八―九頁。

（註二二）Ricardo, ibid., p. 127. 邦譯一三一頁。

（註二三）J. S. Mill, ibid., p. 603―1. 併し乍ら一般價格理論に於て、費用法則に對する需給法則の優位を認め、國際價格理論に於て比較生産費原理（費用法則）に對して國際價値論（需給法則）を付加したミルは、國際貨幣理論に於ても金屬主義に忠實たり得ず、國際需要の作用を認め、次の如く修正して居る。「從つて正確を期すならば、我々は次の如く云はなければならない。貨幣の價値が最も低い國、換言すれば物價が最も高い國は、輸出生産物が海外に於て非常に需要されて居り、最小の容積で最大の價値を持つ商品ある國、鑛山に最も接近せる國、並びに外國生産物に對する需要が最も小なる國である。……故にシニヨア氏が英國勞働者の最大なる能率が何故他國よりも英國に於て僅かな費用で貴金屬を得られるかと云ふ事の主要な原因として指摘して居るのは正しいが、私はそれだけで英國の貴金屬のより小なる價値を充分説明するものと認める事は出來ない。」（ibid. p. 609）

（註二四）Ricardo, ibid., p. 123. 邦譯一二七頁。

（註二五）Ricardo, ibid., p. 127. 邦譯一三一頁。

## 二、名目主義的見解

古典學派論者は國際間に於ける貨幣現象に關して、一方に於て前述せる如き金屬主義的説明を與へると共に、他方に於て名目主義的見解に基いて之と全く異つた、相互に矛盾せる説明を與へて居る。即ち貿易理論の一部として提供した正貨移動論乃至正貨分布論が之である。（註二六）

リカード曰く「世界の貨物を流通させるために用ひられた貴金屬は、銀行の創設されるより以前に、地球上の文明諸國民間にそれ〴〵の商業及び富の狀態、從つて各國がなさねばならなかつた支拂の數と頻繁さとに應じて、一

定の割合で分配されてゐた。斯くの如く分配されて居る限り、貴金屬は、到る所に於て同一價値を有し、然も各國は何れも現在使用してゐる數量に對して、同じ程度の必要を感じてゐるのであるからして、貴金屬の輸出入を促すべき誘惑は存在し得なかつた。」（註二七）と。而してその論證をより詳細に辿るならば次の如くである。曰く、「今之等の國の中の或る一國に於て金鑛が發見されたとすれば、その國の貨幣の價値は、流通内に持出される貴金屬の量が增加する結果として下落し、從つて諸外國のそれと同一價値を持ち得ない事となるであらう。而して金及び銀は、鑄貨たると地金たるとを問はず、總ゆる他の貨物を支配する法則に從つて直ちに輸出の目的となるであらう。即ち金及び銀は、廉い國を去つて高い國に行くであらう。而して若しその鑛山が生産的であつたならば、その限度に於て金銀の移動は繼續し、結局鑛山發見前に各國内の資本と貨幣との間に存在した比率が回復せられ、金銀が到る所で再び同一價値を持つやうになるだらう。その場合輸出された金の對價として、貨物が輸入されるであらう。」（註二八）と。例へば一オンスの金が佛蘭西に於て英吉利に於けるよりもより高い價値を有し、同一の商品をより多量に購買し得るとすれば、金は當然英吉利を去つて佛蘭西へと流出する。其の結果英吉利に於ては金の數量が減少し商品數量が增加して貨幣價値の騰貴が齎されるに對し、佛蘭西に於ては逆の過程が行はれ貨幣價値が低落する。結局一オンスの金が兩國に於て同一の價値を有するに至つて金の移動が止む。「かくて一國の通貨は、貴金屬の分量に變化のない限り、久しきに亘つて他國のそれよりもより大なる價値を持ち得ないものゝやうにみえる。」（註二九）

以上の如き正貨移動論は名目主義的學說に依つて基礎付けられて居る事は云ふ迄もない。アフタリオンの云へる如く、それは「貨幣數量說の單純なる應用に止まるものではない。それは數量說の重要なる一部分を構成して居る。」（註三〇）然もその場合貨幣は金に依つて示され、少くも同一視せられて居り、貨幣數量說は素朴な金數量說の形態をとつて居る。而してその理論的内容は前述せる（本節一）古典學派自身の金屬主義的見解と幾多矛盾した點を含んで居るのである。

即ち各國に於ける貨幣の對内價値は其の國の貨幣――金數量の增減に比例して變動すると云ふ理論から出發し、前述せる金屬主義的見解から先づ此の點に於て離れる。金屬主義貨幣學說にあつては、各國貨幣の價値はその素材價値――投入勞働量乃至生産費に依つて規定せられて居り、貨幣の數量も亦それに制約せられ、たとへ一時的な變動はあるとしても、生産條件に變化無き限り貨幣數量は任意に增減し得ず、從つて貨幣價値も亦不變であると看做される。然るに名目主義貨幣學說に於ては、各國貨幣價値は貨幣自體の素材價値に關係なく、その數量の增減に從つて變動し、貨幣價値の逆數としての物價水準も亦變動すると考へる。而して此の貨幣と商品との數量關係に基いて變動し得る各國の貨幣價値乃至物價水準は、完全なる金本位制度の下に於ては貨幣（正貨）の國際間移動なる過程を通じて、世界的な均等化が行はれると云ふ。然も金本位制度は爲替相場をも法定平價に一致せしめ、それに基いて換算された各國貨幣、即ち一定量の金は何れの國に於ても同一の商品購買力を持つものと看做される。若し各國間に貨幣價値――商品購買力の差異が存在する場合には、貨幣は當然その價値のより低い國を去つてより高い國へ流出する。その結果前者に於ては貨幣數量の減少に基いて貨幣價値の騰貴が、後者に於ては貨幣數量の增加に基いて貨幣價値の減少が齎され、かくて各國貨幣價値の國際的均等の狀態が實現する事となる。此の點に於ても亦金屬主義的見解と明白に區別される。前述せる如く金屬主義貨幣學說にあつては、各國間に勞働資本の自由移動が行はれず、國際間に勞働價値法則乃至費用法則が妥當しないと看做す限り、各國の價格機構はそれ〴〵全く獨立して居り、貨幣價値の國際的均等化は實現し得ないと見る。たゞその場合各國間の爲替相場が一定の關係（法定平價）に固

着せしめられるのみである。即ち金本位制度の機能は、各國の爲替相場を安定せしめるとしても、各國貨幣の商品購買力をも均等化せしめるものではない。而して若し各國間に貨幣價値の差異が存在するとすれば、それが生産條件に變化無き限り永久的なものである以上、その結果貨幣が價値低き國より高き國へ移動する現象も亦永久的なものである。寧ろ此の正貨の永續的移動こそ、各國貨幣價値の永久的差異が存し乍ら、然も爲替相場を一定の關係に維持せしめる原因である。然るに名目主義的見解に於ては、斯かる正貨の永續的移動を許さない。正貨が貨幣價値の低い國より高い國へ移動した結果、兩國に於ける貨幣數量の變化の爲めに貨幣價値が均等化すると考へる以上、その貨幣價値の國際的均等化が實現した曉には當然正貨の移動も停止し、金の世界的分布が均衡狀態に達するものと看做さなければならない。此の點に於ても亦金屬主義的見解と矛盾する。

（註二六）前掲拙稿「正統學派貿易理論」一一〇―一一二頁參照。

（註二七）Ricardo, The High Price of Bullion. 前掲邦譯三三頁。

（註二八）Ricardo, ibid. 邦譯三五―六頁。

（註二九）Ricardo, ibid. 邦譯三八頁。

（註三〇）A. Aftalion, L'or et sa distribution mondiale, 1932. 永田清・中村金治兩氏共譯九頁、尙ほ三―一四、一七六、一七七頁、松岡考兒氏著「金問題研究」三節金數量說一六六―一七四頁參照。

＊　＊　＊

古典學派論者が以上述べ來つた如き相互に矛盾撞着せる二樣の說明を與へるに至つた理由は何であるか。それは云ふ迄も無く、素材價値論と貨幣數量說とを調和せしめる爲めに必要な前提たる勞働資本の自由移動を國際間に於て否定し乍ら、然も兩理論に基いて國際間の貨幣現象を說明したからに外ならない。前述せる金屬主義的見解と名目主義的見解とは何れも金本位制度下に於ける爲替相場の安定と云ふ事實は之を認める。兩者の間に於ける最も根本的なる矛盾は、一方に於て各國貨幣の對內價値――商品購買力が永久的に差異あるものであると云ひ、他方に於てそれは均等化するものであると云ふ點にある。若し國際間の勞働資本移動が自由であると假定したならば、金屬主義的見解に立つたとしても、勞働資本はより高き利潤を求めて移動する結果各國に於ける貨幣價値――貨幣對商品の交換比率が均等化する事も認め得るのであつて、名目主義的見解との間に於ける右の矛盾は直ちに解消する。又金屬主義的見解に於て各國の貨幣價値の均等化を認めるならば、名目主義的見解と同樣にその均等化が實現した場合正貨の移動も停止し、正貨の世界的分布も均衡狀態に達するものと考へる事が出來る。かくて國際貨幣理論として金屬主義と名目主義とは充分調和し得るのである。從つて古典學派論者が國際貨幣現象の說明に際して陷つた矛盾は、一に國際間に於ける勞働資本の移動困難なる事實に基くと云ひ得る。（註三一）然もそれは彼等の貿易理論の基本的前提であると云ふ致命的欠陷を示して居る。

（註三一）特にリカードの場合に於ける矛盾を指摘したものに左の如き著書論文がある。比較參照せられたい。

Cassell, Money and Foreign Exchange after 1914, 1923, p. 173.―Angell, The Theory of International Prices, 1926, p. 67-71. 田中金司氏著「金本位制度と中央銀行政策」第一篇第五章一六一―一六九頁、春日井薫氏著前揭書一六三―二〇一頁、油本豐吉氏著「商業政策」第五章一節、二四一―三〇二頁、山口茂氏述「自然價値概念と購買力平價」（商學研究七卷二號二四―四二頁）川村豐郎氏述「獨占價格としての爲替相場」（商學研究七卷二號四三―六二頁）金原賢之助氏述「購買力平價說序說」（三田學會雜誌三一卷五號五〇―五八頁）等。

## 第四節　貿易理論と貨幣理論との交渉

前節に於て我々は、古典學派論者が國際間に於ける貨幣價値の關係を説明するに當つて、金屬主義學説と名目主義學説とに基き、二樣の然も相互に矛盾せる説明を與へて居る事を見た。斯かる貨幣理論上の混亂は、彼等の貿易理論（國際價格理論）に對して如何なる影響を與へたであらうか。彼等の金屬主義的見解並びに名目主義的見解はそれぞれ彼等の貿易理論と如何なる論理的關聯を有するか。之等の問題を次に採り上げて、本稿の中心問題の解明に移らう。

古典學派貿易理論は比較生産費原理と國際價値論とに依つて構成され、然もそれ等は一方に於て自由貿易政策の論據たると共に他方に於て國際價格現象の説明であつた事は、筆者の屢々主張せる所である。比較生産費原理に依つて、（一）貿易利益發生の可能性、（二）各國價格水準間の關係從つて相互に貿易する商品の決定を示し、國際價値論に依つて、（一）貿易利益の當事國間への分配の樣態、（二）國際商品價格の決定を説明する。而して兩理論に於て（一）の命題即ち貿易の利益は如何にして生じ、その利益が當事國間に如何に分配されるかと云ふ問題は、古典學派論者にとつて決定的重要性を持つて居た。斯かる貿易政策原理的意義の重要性は、必然的に兩理論に對して次の如き内容を要求したのである。貿易の利益として勞働量對生産物の關係を示すべく比較生産費原理を勞働費用で表現する事、利益の分配を示すべく國際價値論の決定するものは相互に交易する國際商品の交換比率である事之である。從つて兩理論が國際價格理論として成立する爲めには、比較生産費原理の勞働費用を價格に還元し更にその比較的差異を絶對的差異に轉化せしめる事、及び國際價値論の示す國際商品交換比率を各國際商品の貨幣價格に還元する事が必要である。此の二つの論證こそ貨幣理論に與へられた役割でなければならない。かくて問題は、古典學派論者の金屬主義的見解と名目主義的見解と、果して何れが良くその任に堪へ得るやと云ふ事である。

### 一、金屬主義―比較生産費原理

先づ我々は古典學派貿易理論と金屬主義學説との關係を吟味しやう。前述せる如く比較生産費原理に關して貨幣理論が課せられた課題は、勞働費用の比較的差異から、價格の絶對的差異へ轉化する事である。此の場合各國の價格單位が異る事實は、金本位制度を前提とする事に依つて容易に解決される。即ち金本位制度を前提とする限り、各國の價格單位はそれが意味する金の重量を通じて一定の關係に置かれて居る。各國の本位として定められた一定量の金にはそれ〴〵の價格單位の名稱（例へば圓・弗）が與へられて居るからして、その金の重量に基いて一國の價格單位は他國のそれに換算せられる。例へば一國の本位貨圓の材料金が一匁であり、他國の本位貨弗の材料金が二匁であるとすれば、一弗は二圓に換算される。從つて殘された問題は、斯くの如くして換算せられ同一單位で示された二國に於ける價格（例へば圓）へ勞働費用を轉化する過程である。

然らば金屬主義貨幣學説の上に立つた場合、比較生産費原理は果してその目的とする理論的展開が可能であらうか。金屬主義學説に從へば、各國貨幣の對内價値はその素材價値に依つて規定せられ、貨幣對商品の交換比率は相互の投入勞働量乃至生産費の比率に依つて決定せられると云ふ。從つて若し一國の價格標準が純金一匁五圓であるとすれば、金一匁を生産するに要する勞働量（例へば五人）が投ぜられた商品の價格は五圓である。かくて比較生産費原理の取扱ふ各商品の投入勞働量は右の勞働量對價格の比率（五人對五圓）に依つて、容易に價格へ轉化し得る。然も兩國に於ける價格單位の差異は、前述せる如く法定平價に基いて直ちにその何れかの價格單位に換算し得、兩國に於ける各商品の價格差の比較が可能となる。然らばかくして得られた二國に於ける二商品の價格關係は如何

なる狀態に置かれるであらうか。我々は兩國に於ける生産條件即ち各商品並びに本位貨のそれ〴〵に投入されたる勞働量の關係の異るに從つて、右の價格關係も亦種々なる場合を想定する事が出來る。而して此處に云ひ得る事は、その場合勞働量の比較的差異が、偶然なる場合を除けば、必しも價格の絶對的差異に轉化されないと云ふ事である。換言すれば、右の勞働量を價格へ還元する過程に於て、比較的差異から絶對的差異へ必然的に轉化する論證を見出し得ないのである。從つて比較生産費原理が國際價値法則の論理的前提たる役割を果す爲めには、右の必然性を更に何等かの他の方法に依つて説明しなければならない。即ち右の結果比較生産費原理の二商品が何れも一國から他國へ輸出されるが如き價格關係が得られた場合、二國が相互に一商品を輸出するが如き價格關係に迄變化せしめられる事情が常に發生する事を示す必要がある。その場合次の如き事情が考へられる。即ち二商品が何れも一國（A國）から二國（B國）へ輸出されるとしても、正貨が逆にB國からA國へ流入し、兩國に於ける貨幣數量の增減が兩國の價格關係を變化せしめ、茲に價格の絶對的差異が發生すると云ふ事である。併し乍ら我々が金屬主義貨幣學説に立つ限り、斯かる推論は許されないものである。即ち勞働價値法則並びに貨幣の素材價値論を强調する限り、諸商品の價格はそれ等のうちに體現せられて居る勞働量に依つて既に規定せられて居り、生産條件に變化無き限り變動せざるものであり、貨幣數量の增減の爲めに影響を蒙るものでないと看做さなければならない。而して比較生産費原理から出發して論を進めて居る以上、商品の生産條件は不變と考へられ、かくて商品價格變化の原因は何等見出されないのである。何故なれば各國の流通過程に必要な貨幣數量、諸商品の實現すべき價格の總額は既に生産過程の事情に依つて規定せられ、若しその必要以上或ひは以下に貨幣數量が增減したとしても、直ちに貨幣（金）の生産の增減を齎し、生産條件に適合するやう貨幣數量が調節せられる筈であるからである。比較生産費原理に於て二商品共に一國より他國へ輸出され、金が逆に移動した場合を考へやう。此の場合金流出國（二商品輸入國）の流通過程に存する金（貨幣――以下同じ）數量は必要量以下に減少する。從つて金はその持つ價値以上の價格を持ち、他の商品はその持つ價値以下の價格を持つ事となる。從つて當該國の商品價格が下落すると一應考へられる。併し乍ら斯かる傾向は生産過程の事情に依つて直ちに矯正せられ、永續するものではない。即ち右の如き金價格の價値以上の騰貴、商品價格の價値以下の下落は、金鑛所有者をして其の國に於ける平均利潤率以上の利潤の獲得を可能ならしめる。斯かる金鑛に於ける利潤の增加は、必然的に新たなる勞働資本を金鑛に導く結果となり、金の數量は增加する。かくて利潤率の平均なる現象に基いて、貨幣數量は金流出前と同樣に、その價値――投入勞働量に依つて規定せられた必要數量に迄回復するに至るのである。又金流入國（二商品輸出國）に於ても同樣に平均利潤率の作用に依つて、金の數量は金流入前の必要數量に一致せんとするものである。以上の如くにして比較生産費原理に於て一國が二商品を輸出し、他國から金が流出しても兩國の貨幣は從前通りの數量關係を保つのである。即ち貨幣の數量、商品の價格總額は流通過程の諸條件から獨立して、生産過程そのものゝ條件から規定せられて居るのである。たとへ正貨の流出入が行はれたとしても、それは各國の價格總額に何等影響を及ぼすものでなく、五圓の商品は金移動の後と雖も依然として五圓の價格を維持し、それに落ちつく傾向にある。從つて比較生産費原理を價格で表現した結果、二商品共一國に於て高いと云ふ價格關係が得られたならば、如何に貿易が一方的方向にのみ行はれ、正貨が逆に移動しても、兩國の價格關係は依然として不變である。前節に於て述べた如く、金屬主義は各國貨幣價値の差異が存在する場合、正貨は永續的に移動し然も貨幣價値の差異は消滅するものではない事を强調する。かくて比較生産費原理の示す二商品の比較的差異は、永久に價値の絶對的差異に轉化する事なく、一國より二商品の輸

出他國より正貨の流出も亦永久に續けられるであらう。

以上の推論に依つて、金屬主義學說に立つた場合、比較生產費原理の貨幣現象下に於ける妥當性を論證し得ない事を知つた。併し乍ら此處で注意すべき事は、比較生產費原理と金屬主義學說との矛盾は、該原理自體の理論的性質に基く絕對的なものではなくして、それが國際價値論の論理的前提たる限り生ずる相對的なものであると云ふ事である。云ふ迄も無く比較生產費原理は、一般價値法則として勞働價値法則を妥當せしめ、然もその妥當性の範圍を各國內に限定する事に依つて成立する。即ち各國內に於ては勞働が唯一の價値決定の要因であると看做す。而して該原理に基いて貿易現象の說明を爲す場合、常に金本位制度を前提とし、貨幣の價値は金の價値に直接結び付けられて居ると假定する。從つて貨幣の價値も亦金に投入せられた勞働量に依つて決定せられると考へるのが適當である。斯くして比較生產費原理はそれ自體の性質からして、貨幣理論として金屬主義學說を採る事は何等矛盾でないばかりでなく、寧ろ斯くする事に依つてその理論的一貫性を保ち得るのである。故に若し該原理が國際價値法則の前提たる任務を放擲するならば、金屬主義學說と容易に結合して、一つの統一された國際價格理論を構成する事が出來る。勿論それは本來の古典學派國際價格理論と全く內容の異つたものであるべき事は云ふ迄もない。その場合比較生產費原理はそれ自身一つの完成された價格理論である。該原理と金屬主義貨幣學說とを結合したならば、各國の價格機構並びに各商品の國際間に於ける價格關係は、各商品並びに貨幣の各國に於ける生產條件、特に投入勞働量の關係に依つて一元的に決定せられる。然もそれは國際間の貿易が行はれた後に於ても、何等影響せしめられず、國際間に價格の均等化が行はれるものではない。即ち商品が各國價格關係の差異に基いて國際間に交易せられたとしても、その爲めに何等特殊な價格として國際價格が成立する餘地はないのである。從つて國際價格現象を取扱ふ場合、比較生產費原理並びに金屬主義貨幣學說に依つて各國の價格機構並びに各國間の價格關係を說明すればそれで充分であり、國際商品價格の說明の爲めに特に他の原理（國際價値法則）を求める必要はない。換言すれば一般價格理論から區別さるべき特殊なる國際價格理論の存在の必要を見ない。國內並びに國際間を通じて價格現象は勞働價値法則に依つて統一的に說明されるのである。

而して右の如く比較生產費原理を解する限り、勞働費用の比較的差異なる內容は無意味なものとなつてしまふ。比較的差異ある各國の勞働費用を同一本位制に還元した價格の絕對的差異へ必しも轉化せしめ得ない事前述せる如くである。從つて該原理に依つて貿易の利益を立證したとしても、貨幣經濟下に於て必しも實現し得るものとは云ひ得ず、該原理の貿易政策原理としての現實への妥當性は全く喪失して居る。從つて比較生產費原理は貿易理論として各國價格機構間の關係を證明する事に依つてその理論的任務は終るべきものであり、その爲めには勞働價値法則が各國內に於て妥當し、然もその妥當性が各國內に限定されると云ふ命題のみ必要であつて、その結果各國間に於て各商品投入勞働量が比較的差異の關係にあるか否かは問題でない。

以上が貨幣理論上金屬主義の見地に立つて比較生產費原理を解釋した場合の國際價格理論の內容であつて、本來の古典學派國際價値理論（註三二）と大いに趣を異にして居る。にも拘らず古典學派論者は前節で述べた如く國際貨幣理論上金屬主義的見解を容認せる結果、特にその傾向强き者に於て、斯かる國際價格の非古典學派的說明が屢〻見出される。例へばリカード曰く、「大概の國に共通な諸貨物の價格も亦可なりの差等ある事は免れないけれども、而も猶ほ利潤率の上には、貨幣の流入若しくは流出の爲めには、全く何等の影響も起らぬであらう。」（註三三）と。其の他特にシニヨア（註三四）、ケアンズ（註三五）等に於て、より明瞭な金屬主義的國際價格理論の論述がなされ、

金屬主義的色彩の最も薄いミルと著しい對照を示して居る。（註二三參照）而して其の後リカードの勞働價値說を純粹な形態に於て發展せしめたマルクス並びにその後繼者に依り、再び右の如き見解が採り上げられたのである。

（註三二）前掲拙稿「國際價格理論」八二―九三頁參照。

（註三三）Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, p. 124.

（註三四）Senior, Three Lectures on the Transmission of the precious Metals, 1827. Three Lectures on the Cost of Obtaining Money, 1830.

（註三五）Cairns, Essays in Political Economy, 1873 (I. the Australian Episode. II The Course of Depreciation.) p. 20-76.

## 二、名目主義――國際價値論

右に述べた如く、金屬主義的貨幣理論を採つた場合、古典學派本來の國際價格理論は比較生產費原理に於て既に躓くのである。從つてより適當なる貨幣理論を求めて名目主義學說に當然赴かなければならない。

比較生產費原理の命題たる勞働量の比較的差異を價格の絕對的差異へ轉化する問題を金屬主義學說が解決し得なかつた理由は、金屬主義に立つ限り、還元された價格關係が生產條件に變化無き限り不變である事を認めざるを得ないからであつた。それに對して名目主義貨幣學說にあつては、各國內に於ける貨幣數量說を容認する以上、比較生產費原理で設定せる各國間の價格關係は、各國の貨幣數量の增減に伴つて自由に變動し得るものと考へ、從つて勞働量の比較的差異を價格の絕對的差異へ轉化する過程を說明する事は容易である。即ち各國に於ける各商品の價格は、その投入勞働量に比例して決定されるが、若し貨幣數量の增減する事情が發生したならば、各商品價格はその比率を保ちつゝ上下に變動するものと看做され、從つて比較生產費原理を價格で表現した場合、常に絕對的差異が發生する事を論證し得るが如く考へられる。即ちたとへ二商品共一國（A國）に於て低く、他國（B國）に於て高いが如き場合に於ても、A國よりB國への商品が輸出され、對價として正貨が逆に流動する結果、A國では貨幣數量の增加從つて價格の騰貴、B國では貨幣數量の減少從つて價格の下落が行はれ、兩國に於ける二商品の價格が同一比率を以て（投入勞働量に比例して）騰落し、然も兩商品價格の比率がA國とB國とに於て異る（即ち比較的差異が存する）以上、二商品中何れか一つのみB國に於ける價格がA國に於ける價格より下落する場合が生ず、かくて價格の絕對的差異は發生し、相互に商品が交易され、然もその結果正貨は移動せず均衡が保たれると看做される。（註三六）

併し乍ら此處に注意すべきは、金本位制度を前提とした場合、右の如き各國に於ける貨幣數量の增減、價格の騰落は恣意的ではなく、或る制約を受けなければならないと云ふ事である。前節に於て述べた如く、名目主義的見解は、金本位制度の下に於て貨幣（正貨）の國際間移動なる過程を通じて各國の貨幣價値乃至物價水準は世界的に均等化する事を認める。即ち一定の正貨が何れの國に於ても同一の商品購買力を有する如き點に至つて、正貨の移動は止み均衡狀態に落付くと考へる。從つて、比較生產費原理の貨幣現象下への妥當性を、名目主義貨幣學說に依つて論證する爲めには、價格の絕對的差異が發生せる場合或ひは比較的差異が絕對的差異へ轉化された場合には常に各國の貨幣價値が均等なる狀態にある事が必要である。併し乍ら果してその事は常に約束されるであらうか。遺憾乍ら我々はそれを論證する何等の手掛りも持つて居ない。古典學派も亦此の問題を回避して居る。即ち彼等が比較生產費原理を價格に表現する場合、貨幣價値が如何なるものであるべきかに付て何等說明せず、常に絕對的差異に轉化するやう各國の貨幣價値を任意に變動せしめるのである。例へばミルは、該原理を貨幣經濟下に適用する場合、次の如く前提して居る。曰く「我々は最初には貨幣價値に付て好むまゝの假定を設けてよい。」（註三七）と。

かくて比較生産費原理に於ける勞働量を、國際的に均等化せられた貨幣價値に基いて價格に還元した場合、その價格が絶對的差異の關係にあるか否かに付て我々は何等の斷定をも下し得ないのである。而してかゝる困難なる事情を暫く不問に付して論を進めやう。即ち名目主義學説は比較生産原理と何等困難なく結合し得るものと假定して、更にそれが國際價値論と如何なる關係にあるかの分析を試みる事とする。

前述せる如く、古典學派國際價格理論上に於ける貨幣理論の任務は、（一）勞働量の比較的差異を價格の絶對的差異に轉化せしめる事――（比較生産費原理）、（二）國際商品交換比率を個々の國際商品の價格に還元する事――（國際價値法則）之である。即ち（一）を解決する事に依つて貿易當事國双方が輸出する商品の發生を説明するのみならず、更に（二）を解決する爲にその相互に輸出する商品總額が常に等しい事を説明しなければならない。蓋し國際價値法則の決定するものは、相互需要の均衡に依つて説明する輸出商品交換比率であつて、國際商品の貨幣價格を直接に示すものではなく、國際價格の具體的決定は、均衡せる貿易總額から間接的に導き出さなければならないからである。此處に於て貿易は常に均衡する事、換言すれば貨幣經濟下に於ても貿易は國家間の物々交換と同一視し得る事が必要となつて來る。而して此の事は決して自明の理ではない。貿易に從事する者は各國内の個人であり、各個人の偶然的な、然も多くの場合一方的な取引の單なる總計が國家間の貿易を形成する。從つて各國間貿易が必しも均衡せられるものでない事は何人も考へ得る所である。即ち右の如き前提は何等の論證なくして主張し得るものではない。その論證こそ國際價値論上に於ける貨幣理論の任務なのである。古典學派論者は明白に之を名目主義學説に求めて居る。即ち前節二に於て述べた正貨移動論乃至正貨分布論を以て之に當てゝ居る。即ち國際貿易に於て各國の輸出と輸入との間に何等の必然的關係無きにも拘らず、貿易の均衡が實現して物々交換と同一視し得るのは、一に金銀――正貨の國際間の移動乃至世界的分布に基くものと解するのである。リカード曰く、「金及び銀が流通の一般的媒介物に撰ばれて居るので、此等金屬は、商業上の競爭に依つて、斯かる金屬が全く存在せずして、諸國間に貿易が純然たる物々交換であつた場合に行はれる筈の自然的交易に適應するやうな割合に於て、世界各國の間に分配せられるものである。」（註三八）と。ジエ・エス・ミル曰く、「國際貿易の法則の考察に際して、我々は物々交換の假定の下に國際交易並びに國際價値を決定する原理から出發した。我々は次に、交換の媒介物としての貨幣の導入が、各個人間に於けると同樣に各國間の交換並びに價値の法則に於ても何等差異あらしめない事を示した。何故なれば之等の同一法則の影響の下で、苟も物々交換組織の下に於ける場合と同一なる交換が行はれ、同一な價値で行はれる事を許す如き割合に於て、貴金屬が世界各國に分布されるからである。」（註三九）と。尚ほその理論付けをより精密に辿るならば次の如くである。「何れかの國に於て、流通媒介物が純粋に金屬であり、突然に增加したと假定する。……その必然的結果として物價は騰貴する。之は輸出を阻止し、輸入を促進せしめる。輸入は輸出を超過し、交易は不利となり、新しく獲得せられてゐた貨幣の蓄積は、貿易を行ふ國々に對して流布され、更にそれ等の國より漸次世界の總ての部分を通じて行はれる。かくして氾濫した貨幣は總ての國に對して均等なる深さに迄擴る。何故なればそれは輸出と輸入が再び相互に均衡する迄流出を續けるからである。（國際需要の永久的事情に何等變化がないと考へるからして）、各國に於て物價が同一割合に於て騰貴するやうに貨幣が流布される時にのみ、貿易の均衡は存在し得るのである。」（註四〇）と。以上の如くにして古典學派論者達は、正貨の國際間移動が貨幣の價値――物價の均等化と共に貿易の均衡をも齎される事を示す。併し乍ら彼等の正貨移動論は前節二で説明せる如く正貨の移動に基く各國貨幣價値乃至物價水準の均等化を説明するものであつて、貿易の均衡はそれから間接的に導き出され

て居るに過ぎない。即ちその際、正貨の國際間移動に基く各國貨幣價値乃至物價水準の均等化の過程は同時に貿易不均衡調節の過程であり、前者の國際的均衡實現せる狀態は亦後者の均衡が實現せる狀態である事が暗默の內に假定せられて居る。かゝる想定の下に於て始めて正貨移動論は貿易の均衡を論證し得るのである。然らば斯くの如き說明は、國際價値法則の要求する貿易均衡の論證として果して充分なものであらうか。國際價値法則は、各國が相互に交易する商品に對して有する需要の均衡に依つて國際商品交換比率即ち國際價格の決定を行ふ。從つて國際價値法則の要求する貿易の均衡狀態は、國際間の相互需要の均衡に依つて實現せしめられたものでなければならない。此の相互需要の均衡に依つて齎される貿易均衡は、正貨移動論が貨幣價値の均等化に基いて說明する貿易均衡と果して同一のものであらうか。我々は兩者が必しも一致しない事を認めざるを得ない。先に引用した章句に於ても見らるゝ如く、ミルは貨幣價値の均等化の爲めに行はるゝ正貨移動を以て貿易の均衡を說明するに當り、「國際需要の永久的事情が何等變化なきもの」と假定して居る。今假りに二國間の貨幣價値、並びに貿易が均衡狀態にある場合を考へやう。若しその一國の需要が何等かの事情に依つて强化せられたとすれば、其の國は一時的に輸入超過を來す。その結果正貨の流出、貨幣數量の減少、物價の下落を齎し、相手國に於ける正貨の流入、貨幣數量の增加、物價の騰貴を齎す。かくて其の國の需要減退と相手國の需要增加を惹起し、再び相互需要が均衡し、貿易の均衡が回復して正貨の移動しない狀態となる。而して此の場合兩國の貨幣價値は最早均等の狀態に置かれてない筈である。即ち一國から相手國へ正貨が流出した結果、兩國の貨幣價値の均等は攪亂されたとみなければならない。かくて國際需要の均衡に依つて實現せられた貿易の均衡は、貨幣價値――物價の均衡と何等の關係もなく、又それを無視して成立するものと考へなければならない。かくして古典學派論者自身彼等の貿易理論を貨幣經濟下に妥當せしめる爲めに使用した名目主義貨幣學說に基く正貨移動論も亦その理論的任務を果し得ないのである。（註四一）

古典學派に於ける名目主義的正貨移動論の創唱者はリカードであり（註四二）、然も彼はそれを最も嚴密に主張した。其の後ジェ・エス・ミルに依つて古典學派の貿易理論と結び付けられたのである。而して後世幾多の論者が、リカードの正貨移動論は非古典學派的のものであり、ミルが貿易理論に於て利用せる正貨移動の說明はリカードからではなくしてソーントン、マルサスの理論を繼承したものである事を主張して居る。（註四三）筆者の見る所を以てすれば、かゝるリカードに對して加へられた非古典學派的なる非難は、取も直さず名目主義的正貨移動論そのものに對してなさるべきものであり、該理論が古典學派貿易理論に對して何等役割を果し得ない事實を示してるに外ならないと考へられる。少しく蛇足の嫌ひはあるが、此の問題を暫らく取扱つてみやう。リカード曰く「諸商品と交換して貨幣を輸出せしめるに至る誘因、即ち所謂逆の貿易均衡は、貨幣が過剩であると云ふ事以外からは決して起つて來るものではない。」（註四四）「かやうに正貨は、それが過剩である場合にのみ、それが最も廉價なる輸出品である場合にのみ、債務辨濟の爲海外に送り出されるだらう。」（註四五）「吾々が過剩なる貨幣を持ち、從つてそれを吾々の輸出の一部たらしめることが適當だと云ふ場合でなければ、吾々は輸出する以上の貨物を輸入しないであらう。鑄貨が輸出されるのは、それが低廉なるためである、鑄貨の輸出は、不利な貿易差額の結果ではなくして、寧ろその原因である。」（註四六）と。　以上の如くリカードは、正貨移動の唯一の原因として各國に於ける貨幣數量――貨幣價値の關係を求め、その不均衡を調節して國際的均衡を實現する爲めにのみ正貨が移動するものと看做した。從つてその場合貿易の均衡、不均衡はそれに附隨して起るものと考へられる。即ち彼の推論は、貨幣の相對的過剩↓正貨の流出↓逆の貿易差額と云ふ順序をとり、之を强調するあまり貿易の逆調の結果正貨が流出する事を否定するに至つ

たのである。それに對してソーントン並びにマルサスは貨幣の狀態からして正貨が移動し貿易バランスが變化する事のみならず、貿易バランスの狀態から正貨の移動する事をも認める（註四七）。即ち一國が逆の貿易均衡を有する場合には、正貨が流出し、その結果物價は低落する。相手國に於ては正貨流入の結果物價騰貴が行はれる。從つて前者にあつては輸出增加、輸入減退、後者にあつては輸出減退、輸入增加の傾向が顯はれ、此處に兩國間の貿易均衡が實現する。要するに貿易の逆調→正貨の流出→物價の變動→貿易の均衡と云ふ過程を强調する。かくてリカードが正貨流出は貿易逆調の原因である事を主張せるに對し、ソーントン、マルサスは逆に貿易の逆調が正貨移動の原因であり得る事を主張する。此處に於て一見兩理論は全く相反するやうにみえる（註四八）。此の點を捕へてエンジエル、ヴアイナー等はリカードが古典學派的正貨移動論の創唱者でないと主張するのである。我々は此處で何故にかゝる論難がリカードに加へられたかを考へてみやう。彼等がリカードの正貨移動論を目して古典學派的理論でないと主張するのは何故か。古典學派貿易理論が正貨移動論に對して要求する論證は常に貿易の均衡が實現すると云ふ事であつて、如何なる事情に依つて發生したるにせよ、換言すればそれが貨幣價値の不均衡に基く場合のみならず、國際需要の不均衡に基く場合に於ても貿易の不均衡は正貨移動に依つて矯正せられると云ふ事實である。故に貿易の逆調→正貨の移動→貿易の均衡の過程が必要である。然るにリカードの所說に從へば正貨移動は貿易逆調の原因であつて結果ではないと云ふ。從つてリカードの正貨移動論は古典學派的ではないのである。而してかゝる事實はリカードの正貨移動論が名目主義貨幣學說に忠實なる結果、古典學派貿易理論の要求するが如き正貨移動現象を必ずしも說明し得ない事の證左に外ならない。勿論リカードが貨幣價値の不均衡→正貨の移動を强調するあまり、貿易の逆調→正貨の移動を否定したのは矛盾であり、又彼の正貨流出→貿易逆調の說明も云ひ過ぎであつて、その場合の貿易の逆調とは輸出の不利輸入の有利と云ふ事情を表現して居るに止まると解すべきである。從つて彼の云ふ貨幣の相對的過剩→正貨の流出→貿易の逆調なる過程は、貨幣の相對的過剩→正貨の流出→（輸出の不利、輸入の有利）→貿易の均衡と書き改めらるべきである。若し然りとすれば、前述せる前提——貨幣價値の不均衡＝貿易の不均衡　貨幣價値の均衡＝貿易の均衡を說定する事に依つて、リカードの說明は貿易の不均衡→正貨の移動→貿易の均衡を論證し得るのである。その限りに於て彼の說明は必しも非古典學派的ではない。併し乍ら古典學派貿易理論に於て貿易の不均衡並びに均衡を生ぜしめるのは、貨幣價値の均衡不均衡ではなく、寧ろ國際間の需要關係である。その意味でリカードの理論は非古典學派的である。それは取も直さず名目主義貨幣學說に基く正貨移動論が非古典學派的なものである事を示すに外ならない。

さて本題に立返らう。前述せる如く、名目主義貨幣學說も亦古典學派貿易理論との結合が不可能である事が分明した。併し乍ら彼等の國際價値法則が不完全ではあるが均衡思想である以上、その理論的性格からして名目主義貨幣學說との結合は本質上何等矛盾無きものと考へられる。然るにそれが不可能なのは如何なる事情に基くものであらうか。此の點を檢討する必要がある。

本稿冒頭に於て述べた如く價格理論と貨幣理論との分業が行はれるのは、前者は貨幣價値が一定であるとの前提の下に於て商品の交換比率を說明し、その一定であると前提された貨幣價値の變動を後者で取扱ふからである。從つて兩者の結合に依つて始めて價格現象の完全な說明が與へられる。國際價格現象に於ても、貨幣理論は國際間の貨幣價値關係を說明し、國際價格理論は國際商品交換比率を說明すべきである。然るに古典學派理論に於ては、國際價値法則と正貨移動論との間に斯かる分業が完全に行はれて居ない。即ち國際間の貨幣價値關係の說明を貨幣理論

（正貨移動論）で行ふと同時に國際價格理論（國際價値法則）でも行つて居るのである。國際價値法則は國際商品の交換比率を説明する理論であるにも拘らず、その説明過程に於て同時に國際間の貨幣價値の關係を不用意にも説明する。即ち國際商品價格の變動は直ちに各國の貨幣價値關係を變化せしめるやう立論せられて居る。蓋し彼等は各國内に勞働價値法則を適用して比較生産費原理を支持してる以上、貨幣價値が如何に變動するとしても各商品ハ價格關係は各國内に於て一定して居るものと考へなければならず、從つてその一商品たる國際商品の價格が變動したならば、其の國の全商品は同一比率を以て變動し、それは當然其の國の貨幣價値の變動をも意味する。而して國際商品價格は國際價値法則の説明する所であり、それは國際間の需要供給の關係に依つて決定される。かくして國際需給關係の變化は當然國際商品價格の變動を通じて各國貨幣價値の關係をも變化せしめるものと看做されなければならない。即ち國際價値法則は比較生産費原理を支持する限り、國際商品價格を説明するに當つて、國際商品の國際間に於ける需給關係に伴つて貨幣價値が變動する事を認めなければならない。換言すれば比較生産費原理に基礎を置いた國際價値法則は各國間の貨幣價値關係を決定する事に依つてのみ、その國際價格理論上の任務を果し得るのである。然るに名目主義的貨幣理論たる正貨移動論も亦各國間の貨幣價値の關係を説明する。而して正貨移動論は各國貨幣價値の均等化を説明するに對し、國際價値法則は必しも均等化を論證するものではない、寧ろ國際需給關係に依つて各國貨幣價値の不均等化の可能性を必要とするのである。かくして國際間の貨幣價値關係は正貨移動論と國際價値法則とに依つて、二つの矛盾せる説明が與へられる結果となる。而してそれは前述せる如く比較生産費原理に基礎を置く事に基因するのである。從つて若し國際價格理論から比較生産費原理を放擲したならば、國際價値法則は各國間の貨幣價値關係に何等關る事なく、國際商品交換比率を均衡關係に依つて説明する事にのみ從事する事が出來る。かくして始めて名目主義貨幣理論と容易に結合し得るのである。

（註三六）前掲拙稿「正統學派貿易理論」一一一頁參照。

（註三七）J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Quesions of Political Economy, 1884. P. 14. 末永茂喜氏譯「經濟學試論集」二四頁。

（註三八）Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, p. 171, 邦譯一二一頁。

（註三九）J. S. Mill, Principles of Political Economy, p. 629.

（註四〇）J. S. Mill, ibid., p. 630. cf. Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, p. 14-16.

（註四一）vgl. Walter Hahn, 'Der Erkenntniswert des kettenschlusses in der Aussenhandelstheorie? Weltwirtschaft Archiv, 1934. I. 39. Bd. S. 80-93.—B. Nogaro, Le rôle de la monnaie dans le commerce international et la théorie quantitaive, 1904. 手塚壽郎氏譯「國際貿易に於ける貨幣の職分と貨幣數量説。」ノガロはミルが國際貿易の均衡の原理を貨幣の性質に求めて居るが、それは交換の一般的條件に求めて居るに過ぎず、「交換に含まれる均衡それ自體を論證せずして、只需要供給法則に從つて此の均衡の決定せらるべき點を證明したに止まる。」との非難を浴びせてる。

（註四二）リカード以前に於ても、Locke, Clement, Vanderlint, Hume, North 等に依つて、正貨移動論が既に主張せられて居た。Angell, The Theory of International Prices P. 38. 油本豐吉氏著「商業政策」一八九—二四一頁參照。

（註四三）例へば、Viner, Canada's Balance of International Indebtedness 1900-1908, 1924, pp. 191 ff.—Angell, The Theory of International Prices, 1926, pp. 56 ff. 油本豐吉氏著「商業政策」二四三—二七一頁。

勿論リカードに正貨移動論の創唱者たるの地位を與へんとする論者も少くない。Bastable, Theory of International Trade, p. 55.—A. C. Whinaker, 'The Ricardian Theory of Gold Movement and Proffessor Loughlin's View on Money',

Quarterly Journal of Economics, Vol. XVIII, p. 220,—Taussig, 'International Trade under Depreciated Paper', op. cit. Vol. XXXX.—Hollander, 'International Trade under Depreciated Paper: A Criticism' op. cit. Vol. XXXII. 春日井薫氏著「貨幣學說研究本位制度篇」一八一頁。

（註四四）Ricardo, The High Price of Bullion.

（註四五）Ricardo, ibid. 邦譯四七頁。

（註四六）Ricardo, ibid. 邦譯四四頁。

（註四七）此等の事情に關しては前掲書 Angell, The Theory of International Prices, p. 56-57. 及び油本豐吉氏著「商業政策」二四四—二七一頁に詳細な論述あり、比較參照せられたい。

（註四八）エンヂェルはリカードの見解を一方的理論、ソーントン、マルサスの見解を双方的理論と名付けて居る。

## 第五節　結　論

以上數節に亘つて我々は古典學派に於ける貨幣理論並びにその貿易理論との論理的關係に付て種々考察して來た。

古典學派の貨幣理論は、相對立する金屬主義と名目主義との二樣の見解を含み、然も一定の前提の下に於てその調和的結合が試みられて居た。然るに國際間の貨幣現象を說明するに至るや、右の前提を放棄せざるを得なくなつた結果、此處に貨幣理論の二元性が暴露して、理論的混亂に陷つたのである。斯くして古典學派貿易理論——國際價格理論はその何れの貨幣理論（金屬主義か名目主義か）と結合すべきかと云ふ問題が發生する。而して古典學派貿易理論——國際價格理論はそれ自體既に二樣の價値法則、即ち比較生產費原理（勞働價値法則——因果的價値思想）と國際價値論（需要供給法則—均衡思想）とに依つて構成されて居り、その結果右の問題の解決を至難ならしめて居るのである。

古典學派論者が比較生產費原理（因果的價値思想）を主張する以上、先づ金屬主義的貨幣學說との結合が考へられる。而してそれは該原理の理論的性質からして當然の事であり、何等矛盾の生ずる余地はない筈である。併し乍ら古典學派貿易理論に於て、比較生產費原理はそれ自體完成せる理論ではなかつた。即ち國際價値論（均衡思想）の理論的前提としてのみ始めて意義を有して居たのである。斯く解する限り金屬主義貨幣理論は比較生產費原理にとつて充分なる役割を果し得ない。即ち金屬主義は、比較生產費原理が國際價値論の前提として有する役割、換言すれば勞働量の比較的差異を價格の絕對的差異へ轉化する論證を不可能ならしめる。かくて古典學派貿易理論は金屬主義貨幣學說との結合を斷念しなければならない。

然らば古典學派貿易理論と名目主義貨幣學說との關係はどうであらうか。前述せる如く之又好ましいものではない。名目主義貨幣學說が國際價値論（均衡思想）と結合する事は理論上何等本質的矛盾無きにも拘らず、國際價値論が比較生產費原論（因果的價値思想）に依つて基礎付けられてる爲めにそれが不可能となるのである。即ちその爲めに國際價値論が要求しなければならない貿易の均衡の事實を、名目主義貨幣學說は論證し得ない。

右の如き古典學派に於ける貿易理論と貨幣理論との錯綜せる關係は如何にして解決すべきであらうか。我々は以上の說明に依つてそれを解決する所の二つの道が與へられて居る事を察知する事が出來る。即ち一つは完成せる國際價格理論として國際價値論から獨立せる比較生產費原理と金屬主義貨幣學說とを結合する事であり、一つは比較生產費原理に依存せしめる事を止めて單獨に國際價値論と名目主義貨幣學說とを結合する事である。而して古典學

派並びにそれ以後に於ける學說史上の發展は後者の道を辿つた。蓋し古典學派國際價格論上、比較生產費原理は破棄され、國際價値法則が發展せしめらるべき必然性が存して居たからである。（註四九）尙ほ前節で述べた如く前者の道はマルクス學派に依つて採り上げられた。此の點は何れ稿を改めて論じる積りである。

然らば國際價値論と名目主義貨幣學說とを結合する爲めには、如何なる理論的工作を必要とするであらうか。前述せる如く（前節二）國際價格理論から比較生產費原理（因果的價値思想）を放擲する事に依つて國際價値論（均衡思想）は名目主義と容易に調和し得るのである。而して國際價値論が均衡思想であり乍ら、比較生產費原理（因果的價値思想）に依存する事に依つて生ずる特殊性は何であるかと云へば、國際價値論が國際商品價格を決定するに際して、國際商品を輸入する國双方の需要に限定された部分的均衡を以てする事である。即ち比較生產費原理に依つて決定された國家並びに商品に關する限りの部分的均衡のみを取扱ふ事である。その爲めに貿易當事國間の貿易の均衡する事が要求せられた。而して比較生產費原理から全く離脫して、均衡思想を發展せしめるならば、國際商品價格の決定はかゝる部分的均衡關係に依らずして一般的均衡關係に依つて說明さるべきである。その場合には最早國際商品價格決定に際して國際間に於ける貿易の均衡を何等必要としない。從つて古典學派貿易理論と名目主義貨幣理論との結合を困難ならしめた事情、即ち國際價値法則の要求する貿易の均衡と名目主義貨幣理論の論證する貿易の均衡とが矛盾すると云ふ困難なる事情は解消してしまふのである。かくして國際價格理論と名目主義とは容易に調和せしめる事が出來る。

次に國際價格理論と名目主義貨幣理論とを如何にして具體的に結合せしめるのか、之が殘された問題である。その爲めには貨幣理論上に於ける名目主義をより詳細に區分規定して、之と價格理論上に於ける均衡理論との論理的關係を吟味する必要がある。又それは古典學派以後に於ける貨幣理論、爲替理論並びに國際價格理論の發展と關聯して取扱ふのが便利であらう。之等は何れ別の機會に論述する事として、本稿に於ては古典學派理論の研究に限定した。

（註四九）前揭拙稿「國際價格理論」一〇九―一一三頁及び「貿易理論の發展と貿易政策原理」第三節以下、九二―一三二頁參照。

（一九三七・五・二四・稿）